ハクをケシ, デイをケス

UDC
495.6-093.5:667.6What “kesu”, a verb, means in the Japanese
lacquer terminology

広 瀬 誠 一*

HIROSE Seiiti

要 旨

原田淑人博士によると、漢字の「消」には、古代のシナでは、物質を「水で処理する」という意味があった。国語の「けす」には、「薄（ハク）を消す」や「消粉（ケシフン）」の実例が示すように金属薄を「すりつぶして粉末状にする」という意味があった。「泥（デイ）を消す」というのは江戸時代の文献によると「薄を消すことによって泥を作る」という意味である。「泥を塗る」ことだとする広辞苑の、日葡辞書を引用しての解釈はちと疑わしい。

1960年2月20日の午後、古文化資料自然科学研究会と考古学会との共催の月例講演会で、原田淑人博士から「硯との関連から見た中国古代の墨」と題する面白くて有益なお話を承った。これが機縁となって、この稿が作られたのであるが、まず、これから私が述べようとすることに関係のある講演の一節を紹介しよう：

『中国には4世紀、晋の時代に石墨と呼ばれるものがあった。今でいえば石炭であろう。太平御覧 巻601；全晋文第102，陸雲3 陸雲与兄平原書に「上三台曹公藏石墨数十万斤，云，焼此消復可用，然煙中人不知，兄頗見之不，今送二螺」とある。和訳すると「上三台の任にある曹公（曹爽であろう）が石墨を数十万斤持っている。これを焼いて、水を加えればまた使うことができるという。だが煤の一族にこんなものがあるとは人は知らない。兄上（陸機）にもはじめてかもしれませんから、こことも二螺を送ります。」とでもいおうか。』

以上のうちには、もしかすると私の間違い、記憶違い、感違いなどがあるかもしれない。これについてはあらかじめ博士の寛容を願っておく。

博士の解説で特に私の注意を引いたのは「消」を「水を加える」の意とすることである。わが国では「消」を「けす」と読ませる。「けす」とは「火を消す」、「姿を消す」，「字を消す」，「消えてなくなる」などの用例からでもわかるとおり，「なくする」とか「見えなくする」とかいう意味を持っているが，「水を加える」や「水をかける」という意味はもっていない。

説文には「消，尽也，从水肖声」とあるから，発音は肖と同じで，意味は水に縁があり，中国では水を加えるという意味もあるのであろう。そういえば，現代の用語でも生石灰（英語で quick lime は生きている石灰の意）に水を加えてできる slaked lime（解きほぐした石灰）を消石灰というのは，やはり水を加えるという意味を消の字に持たせた先人の配慮であったのだろうか。

新に仕入れた知識をわが薬箱の物としたいばかりに，私は，昔のシナでの「消」の用例を捜すために漢和大辞典¹⁾を開いてみた。そこに見出した「消」の意味は：

新に仕入れた知識をわが薬箱の物としたいばかりに，私は，昔のシナでの「消」の用例を捜すために漢和大辞典¹⁾を開いてみた。そこに見出した「消」の意味は：

(1) きえる。けす。1.1 つきる，1.2 ほろびる，1.3 見えなくなる，1.4 とける，1.5 ちる，1.6 欠ける，1.7 へる。(2) よわる。(3) しりぞく。(4) ひそかに行なう。(5) もちいる。(6) とろける。(7) せうかち。以下(12)まであり，そのほかに邦訓として(13) きえる，死ぬ。(14) けす。14.1 跡や姿をかくす，14.2 そしる，14.3 つぶす，14.4 燃えをとめる，といろいろあるが肝心の「水を加える」がないのはいささか当はずれの気味である。そこで今度は，日本語の「けす」の方はどうだろうと，念のため広辞苑²⁾を引いてみたところ，そこで私は意外な拾い物をしてしまった。

広辞苑で見出語「けす」のくぐり方は次のようにある：

(一) 燃えをとめる，(二) なくなる，(三) 形跡をなくす，(四) きもを「つぶす」，(五) けなす，(六) たやす，(七) 塗る，鍍金（めっき）する。日葡辞書「デイヲケス」。

大日本国語辞典³⁾，大辞典⁴⁾，大言海⁵⁾などにも(一)～(六)の意味は大同小異に解説してある。大辞典には運歩色葉集(1589)の「滅ケス」が引用されている。どの国語辞書も「水を加える」は載せていない。広辞苑だ

* 関西ペイント KK

昭 35. 5. 11 受理

けが日葡辞書の「デイヲケス」を引用して、「けす」には塗る、めっきするという意味があるとしている。専門がらで、私の興味はいつしか「水を加える」をおいてきぼりにして、「泥を消す」に移ってゆき、「消す」に縁のあることばについての辞書いじりを続けていった。

めっき：

減金「めっきんの音便。貴金属を焼きつけて、その色を変ぜしむる故減金という。」(一) 金属に金、銀などを(アマルガム法で)焼付けること⁵⁾。

でい：

泥 (二) 金銀の粉を、膠水に溶したるもの。これを金泥(キンデイ)又は泥金、銀泥(ギンデイ)又は泥銀という⁵⁾。

泥 (2) 金銀の箔を細かにすりつぶして粉末にし、これを膠水でねって泥状にしたもの²⁾。

けしふん：

芥子粉 極めて細小なる蒔絵用の粉³⁾

消粉 蒔絵に用いる極めて細かい粉、多くは安物の蒔絵に用いる²⁾。

けしまきえ：

消蒔絵 簡単なる安蒔絵のことで、乾きの早い絵漆で絵様を描き、これを陰室に納めて殆ど乾きかけたるとき、消粉(ケシフン)を綿につけて擦りつける法である。消粉とは金薄を粉にした金泥のこと。後略。(吉野富雄)⁶⁾

辞典からは以上のことが判明した。吉野富雄氏は漆芸の大家であり、その道の古文献にも精通していられる方であるから、上の記述に間違いはあるまい。してみると「消す」にはもう一つ、在来の国語辞書に採録されなかった「(金属薄を)すりつぶして粉にする」という意味の用例があったのである。これは漆工に関係の深い術語ともみられることばなので、こんどは、向を変えて徳川時代の刊本で漆塗りの技術のことを書いたものから、私の知っているのは残らず引用して、文献そのものに事実を語ってもらうことにした。刊行年代順に古いものからあげてみる。原本の振りがなほ組版の便宜を考えて漢字の次に括弧に入れて片かなで書き添えた。1オは1丁表、2ウは2丁裏など。

為井童草⁷⁾：

1オ。唐の蒔絵はちやんと云油にて書 箔をけしてふりたるもの也

9オ。けし蒔絵というは寝(ネ)箔或はつかひきしたる箔をにかわにてけしたるをくづけしといふ さもなき箔をけしたるを箔けし鉛と申に上品中品下品有 是等を以て書事なり

日本居家秘用⁸⁾

13オ〜14オ。金銀の泥(デイ)を消(ケス)法 先肌(ハダへ)のよき磁器(ヤキモノ)に箔を五十枚又…枚二百枚も入 膠水(ニカハミツ)にてほろほろにし指(ユビ)のはらにてしばしば鉢(ハチ)にすり付けてけすべし 大かたにけして水を入 鉢(ハチ)に一面(メン)に付たるを一所に洗いよせ いさせ置て上(ウハ)水をしばかにしたみすて火にかけ置 膠(ニカハ)水を加(クハ)え手をととめずけすべし 水乾(カハ)きたる時は膠水を少づつ加(クハ)へ水多(オホ)き時は火にかけいく度(タビ)もかくのごとく指のはらにてすり付 けすべし 終(オハリ)には水を入いさせ置 上(ウハ)水をしたみ捨(スツ)べし 直(スグ)につかふときは水気(ケ)少あるを筆にてかきあげつかふたくわへ置ときは少火にかけ乾(カハカ)し置べし

万金産業袋⁹⁾：

7ウ。扱けしふんといふは絵師、経師の製する泥(デイ)のけしやうに似たれとも、右の泥は箔を、中指と無名(ベニサン)指の腹にて鉢にすり付け、数千へんを重ね細末してつかふ。爰のふんのけし如(ヨウ?)は、でい屑(クズ)とて箔くずあり。それを一度に何百何拾奴も消す事なれば中々指(ユビ)さきにて消(キヘ)かたし。殊更泥くず 至極かさ高なる物なれば、手にて抓(ツカ)み、にかわに合せ、大きな鉢へ手のひらにて摺つけ摺つけ消す事也。すいふんけしけしてこまかく成し時、大ふんに水をいれ火にかけて、膠気をとる。常。にかわづかひの泥とちがひ、みぢんにてもにかわ気(ケ)あつては漆に合す。黒みいづる。よつて如レ此して、すいふんと膠気(ニカワケ)をとる事也。でいふんといふも、製法は同じなれとも、これは箔にて製するなれば、少しはけしふんよりは上品也。

蒔絵大全¹⁰⁾：

20オ。光描金(ヒカリマキエ)は消(ケ)し粉(フン)なり 粉は粉(コ)に落(ヲト)したるをいふ 消(ケ)し粉(フン)といふは粉(フン)にあらず 消(ケ)し泥(デイ)とて箔(ハク)を鉢(ハチ)の中(ウチ)にして水にそそぎ指を以(モツ)て摺消(スリケ)して泥(トロ)となす 泥(デイ)と粉(フン)とは初(ハシメ)より各別(カクヘツ)のもの也 漆にて書て其上に蒔(マキ)て磨(ミガ)かずしても光(ヒカリ)あり依(ヨッ)て名(ナ)づく。(徳川時代の文献引用終り)

「薄を消す」の意味は一層明確になった。居家秘用や産業袋では「デイをけす」は「泥を塗る」でなくて、「ハクをけして泥とする」という意味らしい。「米をたいて飯とする」、「水をわかつて湯とする」と言わないで、いきなり「飯をたく」、「湯をわかつ」とってしまうの

と同じ言い廻しであろう。日葡辞書¹¹⁾は万金産業袋より130年も前に出来た本だが、130年の間に「消す」の意味が「塗る」から「粉にする」に変わったのであろうか、いやことによると日本語の語法に十分には慣れていなかったかもしれないバテレンやイルマンが、「を消す」の「を」に引きずられて意味をとり違えたのかもしれない。

Settle させることを「いさせ置く」、傾瀉することを「上水(ウワミズ)をしたみ捨てる」という言い方のあったことも私にとっては新しい発見であった。

引用文献

- 1) 諸橋徹次編 大漢和辞典 卷六 昭和32年.
- 2) 新村出編 広辞苑 昭和35年.
- 3) 上田万年・松井簡治共編 大日本国語辞典 大正5年.
- 4) 平凡社編 大辞典 第9巻 昭和10年.
- 5) 大槻文彦編 大言海 昭和19年.

- 6) 平凡社編 大百科辞典 第8巻 昭和7年.
- 7) 井上茶全子著 為井童草 上 宝永2年(1705). 書名は iidogusa と読む。iido の何物であるかは私にはわからない。卑下して「市井の童子のために」の意を持たせたのでもあろうか。
- 8) 三宅建治著 日本居家秘用 卷六 享保17年(1732)
- 9) 三宅也来著 万金産業袋 卷三 享保17年 万金は mankin または bankin, 産業袋は nariwaibukuro または sugiwaibukuro と読む。同年に出た日本居家秘用の著者とこの本の著者とは同姓だが同名ではない。同一人かどうか明かでない。
- 10) 大岡甫政著 図式雛形蒔絵大全 卷五 宝暦年間(1751~64)
- 11) 日葡辞書 (VOCABULARIO DA LINGOA DE JAPAN) 慶長3年(1603). 日本耶穌会長崎学林刊行。

(1960-5-2 稿)

正誤表 色材 Vol. 33 No. 5

ページ	欄	行	誤	正	ページ	欄	行	誤	正
目次		10	喜田 孝	喜多 孝	"	右	6	特殊料	特殊塗料
英文	左	21	corter	coater	"	"	8	法法	方法
"	"	—10	Kasuko…(…)	Kazuko…(214)	234	左	6	タンマンマル	ダニマル
213	"	—14	いただきます。	いたゞきます。	236	表(3. 4. 2)		ルチチ	ルチル
218	"	—1	図 2	図 8	238	左	8	光透過率	光透過率
219	—		著者名 笹野公昭	笠野公昭	239	"	—7	大めい	大きい
"	右	図 1	試板(鋼板)	試板(銅板)	"	"	—6	級を敷いてクッション	紙を敷いてクッション
"	右		第2表	表 2					
221	左	—6	考慮	考慮	240	右	7	塗膜は	塗膜に
"	"	—5	色差別範囲	色差別別範囲	"	"	13	一偏	一遍
222		3	preparatin	preparation	241	左	15	同好の士	同好の士
223	右	8	仕意の実験験料	任意の実験試料	"	"	—2	当って次第で	当って望む次第で
227	左	8	No. 4 効正機	No. 4 校正機	244	右	—7	数古	新古
"	右	8	腔言	緒言	245	右	16	[p 33—064]	[p 33—065]
228	右	—2	これ以上の	これも以上の	"	"	23	[p 33—065]	[p 33—066]
231	左	31	であり, 24	であり, 24時間の蒸発量を測定した。	"	"	34	[p 33—066]	[p 33—067]
"	右	1	時間蒸発量を測定した。	(削る)。	"	"	—7	用諸	用語
"	"	21	考えている	よいと 考えている。	246	—	左肩	346	246
"	"	27	わけではなく目下	わけではなく目下	"	左	14	津来	従来
232	左	20	芽ヶ崎	茅ヶ崎	247	左	13	ワニス	ワニス
"		(脚注)	1960)) 1960	1960) 183)	"	"	14	抹否	採否
					"	右	2	フタル酸	フタル酸
					"	"	14	ツヤフ無タル酸エナメル	ツヤ無フタル酸エナメル

(注) なお、本誌 Vol. 33, No. 5 第 230 ページ右欄図 2 中ビニルパイプの右端は右側容器のケロシン中であり、左端は左側容器の底部付近にあって、左側容器の右肩には空気排出パイプが装着されている。(上記の点で手違いがありましたので、ここに訂正致します。)